

第 3 回山陽小野田市基本構想審議会	
開催日時	平成 2 9 年 3 月 2 3 日（木）午後 7 時～午後 9 時
開催場所	山陽小野田市役所本館 3 階 大会議室
出席委員	吉川委員、石川委員、田中由紀子委員、小松委員、長谷川委員、瀬口委員、平中委員、民谷委員、岡野委員、中原委員、渡邊委員、平田委員、藤田委員、原雅典委員、田中剛男委員、岡山委員、原孝造委員、中村委員、松原一雄委員、塩田委員
出席職員	総合政策部長、企画課長、企画課課長補佐、企画課主査、企画課主査兼企画係長、企画課行革推進係長、企画課主任
協議概要	<p>1 開会</p> <p>2 議題</p> <p>(1) まちづくりの基本理念及び将来都市像の検討に当たってのキーワードについて</p> <p>(2) まちづくりの基本理念について</p> <p>主な質疑応答</p> <p>【会長】 まちづくりの基本理念について御意見はあるか。</p> <p>【委員】 住み良さというのが漠然としていて、個人的には母子家庭で子育てをしてきたので 1 回も住み良いと思ったことがない。高齢化しているが、高齢者たちの交通手段として、バスの本数が最近減り、学生もだが、高齢者が一番困っている。田舎の離れた所からちょっとした商業施設に行く足がない。それだけで既に住み良くないと思う。</p>

【委員】

今の意見と似たようなことだが、「基本理念・将来都市像」なのでこのようなことでいいと思うが、腑に落ちない部分もある。この基本理念から見ると、山陽小野田市の住民はある程度の基本的な生活設計ができるような暮らしをしていて、この中にあまり弱者や貧困や病気などの人の言及がなされていないように感じる。これを基にしてこれに付随する細かい施策が今から出てくると思うが、福祉という面で、もう1項目ぐらい加えられないかという感じがする。

【委員】

最初に資料1で説明していただいたものが、現在ある第一次総合計画の基本理念なので、ベースに考えてもいいと思うが、資料2のいろいろなアンケートや会議で出たキーワードをかなり揉んでいったほうがいいのではと思っている。第二次総合計画の中で一番大事だと思うのは、資料2の右側「生きがい・楽しい・遊べる」にある「誰もが楽しみや生きがい」ということ、これが非常に重要になってくるのではと思う。先ほど言われたように弱者を中心とする。もちろん強者も含めるが、幅広い市民の皆さんの楽しみや生きがい、暮らしやすさも含めた基本理念というものを作っていければと思う。

【会長】

資料1は前回のもので、資料2に出ているのが今回の審議会や市民の声など、いろいろなものを通じて出てきたキーワードということである。むしろ資料2を中心に御意見をいただいたほうがよい。

【委員】

「学ぶ・育つ」に関して、幸い山陽小野田には山口東京理科大学があり、大学になるぐらいだからそれまでの段階がある。まず都市を育てるためには必ず教育というものが絶対にいるが、教育に金銭が発生してはならないと個人的には思う。それを予算でどうするのか、個人的にはどうすることもできない。これから人を育てていこう、人口を増やそうというのなら絶対に教育からである。それと、以前、県知事がサイクル施設を県内に 100 ぐらい作ると思っていたが、山陽小野田には何か指示があったのか、作る計画があるのか。あと、何十年も前に市で公園をやたら作っていた。人が入り込めないような公園もたくさんある。そういう忘れていたような公園をもう 1 回見て、ないものを作るよりあるものを利用して、憩いの場とか、サイクル施設をそこに持っていくなどすれば、意外と交流に使える。山陽小野田が一つだけ飛び抜けて考えても、隣には宇部、下関と、間があるので、それに準じてなだらかに人が交流していくように、他地域とのことも兼ね合う必要があると思う。サイクル施設はすぐ考えたほうが良いと思う。

【事務局】

今の御質問について、県知事が「サイクル県」ということで手を上げられている。これは県全体で取り組もうとしており、当初は山陽小野田市が入っていなかったが、この「サイクル県」の会議の中に今回追加で入れている。県のサイクル構想に並行して、山陽オートレース場を活用してパラサイクリングの練習をされた方々が何名かリオ・パラリンピックに出ている。パラサイクリングの拠点施設について

も今後協議という形になる。おっしゃるようにこれは単独市ではなかなかできなくて、広域で考えなければならないので、県と各市町が共同して取り組む形になるかと思う。公園の件だが、旧小野田の場合は都市公園が多かった。これからの公園整備は非常に難しいということもあり、既に公園の見直し計画があり、充実させていこうというところである。新たに作るのではなく、充実させていこうと方向転換をしている。

【委員】

これは基本理念というか、そのあとの将来の都市像にも関係することかもしれないが、いろいろな会議で同じことをずっと言い続けている。それは、山陽小野田市が独自にできる山口東京理科大学の公立化と薬学部の新設、どこにもない、これは絶対にこれからの山陽小野田市にとってのキーだと思う。「にぎわい・活気」というキーワードは若者、山口東京理科大学に学生が集まってきて、若い教授陣も集まってきて人口が増え一時的にでも増える。学長は、この大学の卒業生をとにかく地元就職させたいと、そういう活動を一生懸命にされている。今の状況で、学生や薬学部の教授陣が来て、山陽小野田市に本当に住もうとするのか。大学の周りも含めてそういう環境にあるのか。交通の便もそうであり不便である。そういう状況の中で本当に住んでくれるのだろうか。宇部のほうに行くのではという懸念を持っている。せっかく学長が卒業生を地元就職させたいと言っても、そういう企業、体制が整っているのか。例えば小野田・楠企業団地、せっかくあるのにもっとアピールして企業誘致して、工業系又は薬学系など、そういう企業をもっと誘致して、地元の学生の受入れ体制をもっと

しっかりやるべきではないかという気持ちも持っている。だから、山口東京理科大学を核にして、にぎやかで活気があって住みやすいまちをどうつくっていくかを大きな柱の一つとして考えていくのが一番いいのではないかと思う。

【委員】

今の御意見に賛同する。隣の宇部市を見てみると人口約17万幾らで、この市長がいつも言われているが、工業出荷額は山陽小野田市のほうが多く、こちらは6万5,000ぐらいである。比較したいのは旭化成の本拠地である延岡市が約12万で、宇部市と産業構造がよく似ている。この5万の差は何かというと、大学があることと空港があるところである。せっかく緒に就いた山口東京理科大学の公営化と薬学部の新設を、宇部市に教授陣が住むのではなく、ぜひ山陽小野田市に住んでいただくように組み立てれば、人口はもう少し伸びると思う。全国的に理科系と文科系の大学が分かれている国立大学は、山口大学と長野の信州大学と静岡大学の三つしかない。山口大学が二つに分かれたのは、歴史的には宇部興産の渡辺翁とその息子さんが工学部と医学部を建てた、そういう先見の明があったと思うが、そのおかげで宇部市は17万幾らの人口があると思う。これをにらんでまちづくりをしていただけたらと思っている。県立山口大学が福祉学部を新設するとき、東京のほうから教授陣に来ていただいたとき、宮野に官舎をいくらか作っているが、空き地がないせいか、結構不便な所へ作ったので、その辺も参考になるのではないかと思う。

【委員】

地域の資源を活かした住み良いまちづくりということで、

当市には文化遺産をはじめ、たくさんの資源がある。地域の資源を十分に活用されて、あれはだめとか型にはめずにまちづくりを進めたらいいのではないかと思っている。

【委員】

基本理念の件だが、開き直って全国的な情勢を見ると、産業の構造の変化で製造業からサービス業へということが書いているが、山陽小野田市は工業都市で、セメントから始まって化学、石炭、それが石油に変わってきている。ほかのところから観光やサービスと言われてそれでやっていけるかという、これは10年の計画だが、山陽小野田市は10年、100年、工業都市で生き残っていくという基本的な方針をもう一度確認するような基本理念でいったらどうかと思う。それには今の大学の関係も出てくるし、大きな企業があるが、企業同士をつなぐのが行政の一つの役目かと思う。それがうまくいけば新しい産業をつくるきっかけになり、製造業自体の転換ということも、行政が指導してできるものではないとは思いますが、厚狭にも新しい企業やどんどん大きくなっている企業もあったりしてきているので、そういう方向性が入った基本理念にしていったらいいと思う。そのあとに文化や住み良さがついてくるのではないかと思っている。

【委員】

大学を核としたまちづくりというのはとても共感して賛成だが、例えば海外では、高校からそのまま大学に入るといふより、社会に1回出てから大学に入って学び直すということが多く聞く。日本ではだいたい25歳以下の大学生が9割ぐらいを占めるが、海外では30歳で大学生とい

う方もたくさんおられるので、今もう山陽小野田市に住まれて定職を持たれている方も山口東京理科大学に入って専門的な勉強ができるし、手に職を持っている方が工学系のことだったらいろいろな技術を学校に伝えることができるのではということで、産・学の垣根、敷居を低くするような交流があるといいと思う。

【委員】

最近感じることだが、地域で魅力のあるものが必要ではないかと思う。魅力があればみんなが集まってくるし、魅力のないところに人は集まらない。最近お年の方は食の文化というか、食べることにとてもこだわりがあって遠くまで行かれる人がたくさんおられる。山陽小野田市を見てみると農業が衰退しているように思う。場所はたくさんあるが、農業の魅力的な生産という意味では後継ぎもいないし、どんなものを作っているかわからないが、山陽小野田市の魅力的なものを作ったりすることが必要ではないかと思う。これからどんどん人口が少なくなっても地産地消で、地元でおいしいものを食べる環境を作ることが大事ではないかと思う。特に高泊とか梶、この辺は農地が広がっているが、耕作放棄地が増えてきている。今から対策をとって、山陽小野田市にはこういう魅力のあるものがあると、そして若い人を育てるような、そういう対策は生き残っていく上に必要ではないかと思う。ここに自然とのふれあいとあるが、小野田の地形を再認識する必要もあるのではないかと思う。結構魅力的な場所があるので、例えば竜王山や本山のほうは整備されてきれいで、厚狭の梶や津布田のほうはロケーションが良くてすばらしい景色がある。こういう所に道の駅などを作り、どんどん人が来るような

対策をとったり、梶の漁港があるし、広い農地もあるので、いろいろな農産物や魚介類などを売ったり、そういう工夫があったほうがいいのではないかと最近思う。これから市の計画に生かしていったらいいのではないかと思う。火の山というのがあるが、山の上にはだいたい展望台のようなものがあり、竜王山には展望台がある。厚狭は火の山ぐらゐに展望台を作れば、一層魅力的なまちづくりができるのではないかと思う。普通のものがあってもだめだと思うので、いろいろな場面において魅力のあるものを考えていくことが必要かと思っている。

【委員】

手をこまねいていたら、あっという間に人口が減っていく中で魅力的なまちを維持するためには人口を増やす、減らさないことが最初で最後というか最も大切なことだと思う。やはり山口東京理科大学が決め手になると思う。人を呼ぶためにはまず立派な官舎を作ってあげて、宇部市ではなく山陽小野田市に住んでもらえたらと思う。できれば学生寮も充実して、市内に安い料金で豪華なものを作ってあげて、住んでくれるとまた魅力も伝わると思うのでそういう発想も必要かと思う。山口東京理科大学だけに限らず、「戻ってきたくなる・帰ってきたくなる」とあるが、そのままいたくなるということも大事だと思う。中学・高校を卒業してもそのまま住みたくなる、その決め手は奨学金制度が大事かと思うので、学生たちに奨学金を出して、地元の人に就職したら奨学金返済を免除してあげるとか、そういう奨学金制度の活用も考えたらどうかと思う。

【委員】

皆さんの御意見を聞いていて、そのとおりだと思うし、そ

れを進めたらいいと本当に思った。広島国税局長が徳山に講演をしに来られたので、行ってきました。きちんとした資料をいただいて、要はこの資料を渡したくていらっしやったそうで、雇用の形態とか、それぞれ資産がどうかというのが全部載っている。その中で悲惨だと思ったのが、非正規社員の比率が圧倒的に多いことである。非正規社員イコール結婚ができない、子どもができない、そうすると少子化のスピードは、人口は山口県 160 何万いたけど 140 何万というペースよりもはるかに速い。小学校の副読本を作らせていただいて毎年配付するが、山陽地区の厚狭小学校がここ 10 何年ずっと一緒である。厚狭小学校は小学校の中で一番人数が多い。高千帆は世帯が一番多いが、その高千帆より少し多い。住んでいる方は自分で判断して、どこに住もうか、どこが便利か、考えて住んでいる。厚狭のポテンシャルがなぜ高いかという、水害に遭ってイメージがとても悪く、土地がどんどん安くなって、二束三文で手放そうかというところで不動産屋が動きだし、アパートなどが建ち始め、その典型的なものとして、ホテルがダウンと建ったのである。それはいっぱいになっている。なぜかという、元々厚狭が持っているポテンシャルが高いということ。立地と、下関と小郡の中間にあり、便利であること。しかし、山陽町の時代、あまりきちんとしたことをやっていなかったためではあるが、それでも人口 2 万 2,000 ぐらいであった。それをもう 1 回見直すこと。それと、非正規雇用でありながらきちんと生活ができる何か新しい時代の山陽小野田市独自の何かを考える必要がある。子育てするのに異常にお金がかからないとか、とても安く住めるとか、うたい文句の象徴としてできないかと思う。それと、まちの中で全部を作ろうとする以前に、下関からの 2 号線のバイパスが間もなく 4 車線で殖生までつなが

り、一挙に長府や小月が近くなる。特に埴生はこれから変わってくると思う。埴生は既に盛況ではあるが、それに拍車がかかると思う。人を集めて商売するのに埴生は適した場所で、厚狭は逆に住むのにいい場所、新幹線駅もあり、県からもコンパクトシティとって指定を受けている。宇部のアクセスもだんだん良くなるとしたら、宇部と下関の間の山陽小野田に特化した何か、人口は増えないだろうけど減らさないで、雇用とかは下関の人も来やすく、お客様としても呼べるということを美祢も長門も入れて、鉄道もうちも観光も、住み良さという面も、そして住みたいと思ったら雇用とかも全部解決するようなこと、アクセスが良くなるし、企業は本気で安く人を雇おうとしているので、それに手を貸せないかと、そういうことが大事ではないかと思う。

【委員】

魅力ある地域ということいろいろ言ったが、他県を見ても、いろいろ企業を興し、特別なパン工房やジャムなど特別な技術を持った人がここでやりたいということがクローズアップされたことがある。何かやりたいという人が自由に、複雑な手続なく、規制緩和されてやりやすいような環境づくりをする必要があるのではないかと思う。何かやる時、手続が複雑で挫折することが非常に多い。手続の簡素化と、相談する窓口を1本化して、その窓口を通して何でもできるというシステムづくりが必要ではないかと思う。そうすれば自分がやりたいことがあってそこに行けばアドバイスを受けてたり税の優遇があったりと、思い切ったものを打ち出さないと、魅力的なショップなどができにくいのではないか。窓口が市にあって規制緩和もあるといいと思う。

【委員】

先ほどの農業の話、大賛成である。女性目から見て、子育てするときが一番気になるのが食の安全である。空いている土地は農業希望の方に貸し出して誘致するとか、公園も小さい畑を作ってみるとか、食べ物が安全で、学問も援助していただいだけ、そして医療も中学校ぐらいまで無料と。そのぐらいになると、北欧などではそういう福祉が充実しているのだから幸せ度もナンバーワンになっている。それがそろっていたら、おのずと工場がなくてもみんなが住みたいというまちになるのではないかと。産むのは女性なので、人口を増やそうとするには、女性が子どもを連れて旦那さんも引っ張ってくるのが一番ではないかと思う。山口東京理科大学には農学部があるのか。

【委員】

農学部はない。

【委員】

そういうこともいずれ発展していくと、余っている土地を農業関係に熱心に研究していただく学生が増え、その学生のバイトが介護の送り迎えだったり、子どもの塾のようなものだったり、学生にさせていただいたらいいのではないかと思う。

【会長】

山口東京理科大学で、薬草を育てるといふのはあるようだが、農学部はない。

【委員】

今我々が思っている強みをさらに強めていくことが必要かと思う。一つは企業関係。山陽小野田市は歴史的にも工業が一番の基盤かと思うので、その技術を基盤にしながら技術力を高めて、どこにもない技術というものを理解してやっていく必要があるのではと思う。もう一つは、幸いに山口東京理科大学もできたが、それ以下の高校・中学・小学校も教育は非常に熱心にされている。小・中学校でモジュール授業をやって非常に成果が上がっているということもあり、今芽が出ているものをさらに強めて、ほかの都市にはないようなものをさらに強めていくということに取り組んでいく必要があるのではと思う。

《休憩 10 分間》

(3) 「将来都市像」について

【会長】

続いて議題の(3)将来都市像について話し合いたいと思う。

【委員】

将来の都市像というのを、ホップ・ステップ・ジャンプの3段ステップで、山陽小野田市がこういうまちになるという論法で考えてみると、まず産業から始めたほうがいいのではないかと思う。大学とその人材を使って地場産業に人が集まるようにすると、それに伴ってインフラも交通も必要になってくるし、そうすると都市型の農業もどんどん盛んになってくる、そういう将来像を描ければと思う。

【委員】

何か漠然としているので、いい言葉を全部連ねてあるが、

全部要求するのは無理なので、まずテーマを決めたらいいと思う。高齢者が住みやすいような「西の巣鴨」とか「禁煙成功のまち」とか、そういうテーマに乗っかって、みんなが想像豊かに来ていただけるのではないか。

【委員】

今我々が考えたいのは第二次の総合計画で、50年100年先の将来ではなく12年で達成できるような目標、テーマを決め取捨選択して10年ないし12年で達成できるような将来像、具体的なものが描ければいいと思う。強みを活かしてさらに強くする、それを起爆にしながら、また第三次のときにはどんどん人が入ってくるというものが作られたらいいと思っている。

【委員】

花火はない、七夕はない、祭りはないといって、全然おもしろくない町である。山陽地区はまだいいと思うが。小野田地区に限ればそういう話で、『今頃はダメだ』と言う人が多く、確かにそういう面がある。魅力あるまちづくりといっても全然魅力がない、暗いまちのイメージがある。将来、今からお金のことを言わなければ、山口東京理科大学から市街地まで30分に1本ぐらいのあまり大きくないバスでどこまで行っても100円というバスを走らせる、あるいは、買物に行く手段がないから住みにくいという話があったが、そういうところにも100円でやってあげるとか、そういうことも考え、乗らなくてもいいから30分に1本必ず来るといふ形の交通網を整備すれば、市街地も潤うし、全部が全部宇部市に行く必要もなくなってくるので、そういう交通体系も考えた都市づくりをしていく必要もあると思う。

【委員】

厚狭で微増ながら人口が増えているということで、今回厚狭小学校が1クラス増える。厚狭の南部地区に100世帯ぐらいの団地ができて、2年間のうちに一気に入居された。その人にどうして厚狭に来たか聞くと、交通網がとてもいいとのことである。そこはバイパスのジャンクションから降りて1分ぐらいの所だそうである。厚狭地区に入院の施設はあまりないが、医療機関が多く医療が充実しているとのこと、子どもがいざという時にとても助かるとのことである。それと、地価がとても安かったこともある。近隣の市町に比べたら地価も高くないし、川より東の地区にあるので水害の心配も全くない。そういうことで厚狭に来たとのことである。自分は学校関係の仕事をしており、今は学生服を買いに来る時期である。親御さんが子どもさんを3～4人連れてきている。少子化というのほうそではないかと思うぐらいである。双子も4組いるそうである。厚狭地区は小学校が今とても充実している。人に来てもらうということは、何かを市でも考えてもらい、交通体系とか、新幹線駅があることも要因の一つかもしれないが、しっかり検討してほしいと思う。

【委員】

交通体系の一つで、JRにお願いして小野田線を埴生駅まで引っ張り、山口東京理科大学の生徒が厚狭でも埴生でも来られるようにすること。小野田線もそもそも山陽小野田線と言うべきだと思う。宇部新川まで行ってもいいし、厚狭から埴生ぐらい、小月まで行ってもいいし、そういうことも視野に入れて、簡単ではないかもしれないが、交通網は大事なことだと思う。昔は大学生になった時にそのまち

に行ってしまうことが多かったが、今は地元の高校を卒業して就職がないから防府のマツダに行くとか、広島や東京に行って就職される人が多い。「帰ってきたくなるまち」といっても、外で結婚して所帯を持って子どもが生まれると、その子どもの子どものとってみたら防府や東京がふるさとになってしまい、最後のふるさとは親の上の代のふるさとになり、イメージとしては帰ってくるのではなく「よそのまち」になると思う。そのため、地元就職してもらうことが最優先にすべき課題ではないかと思う。

【委員】

今、工業高校などで進学する人が増えており、しかし離職率 50%と、20~21 歳で半分の人が辞めるそうである。離職したあとに次の再出発を手助けして『いらっしゃい、ちゃんとするよ』と、住み良いとかやさしさは、そういうところにあるのではと。暑い、寒い、汚れる、肉体労働もあるというところに人が来ないので、自分は印刷屋だが、工業団地のお客さんは人手不足で悩んでいる。福祉の世界はずっと求人しているが、もって1年で、とにかく新卒が欲しいそうである。ある程度仕事が終わっている人は早く見切りをつけるそうである。地元で勤めて地元で育てて、外へ出ても帰ってくるとか、その辺を行政でも民間でも全員で考えなければいけないことでしょう。会議所では考えなくてもいいが、考えなければいけないような雰囲気がしている。

【委員】

ニュースで見たが、下松だったか、学生数が 500 人以上増えていると。それは宅地開発の結果だということである。山陽小野田市の行政は怠慢なのではないか。その宅地を山

口東京理科大学の学生用や高齢者用に作るとか、海外からの介護に関する人手不足を補うために、ざっくりと儒教のある国からやさしい人を募って住んでいただくためにも宅地開発は必要なのではないか。

【委員】

下松は確かに人口が増えているが、宅地開発は民間がやっており、あそこは場所的に非常に良く、下松は合併しなかったので中山間地域がない。今、人口が減っているのは中山間地域である。下松市はいいところしか持っていない。旧徳山市・光市のちょうど真ん中にあり、家を建てる通いやすいということもあり、人口が伸びているのは下松、山口の中心地と小郡、厚狭、下関のバイパスが通った辺りというように、限られている。岩国も少し伸びており、街中だけは伸びている。

【委員】

宅地を造って家を建てるということもあるが、空き家がたくさんあり、とにかく空き家だらけである。まだ十分に住める家はたくさんある。それをもっと活用する方法を考えると、耕作放棄地や遊休地もたくさんあるので、特産品を開発してそこへ集中的に資金をつぎ込むということも必要なことだと思う。行政で農業関係に詳しい人とかを中心に特別な課でも作り、研究しながら希望者を募って開発をすると、人の雇用にもつながるし、ある程度年配の方でも手伝いができるので、お年寄りにも仕事が提供できる。小豆島のオリーブとか、九州でコーヒーもハウスで作っているところがある。イチゴは利益が大きいし、いろいろなことを研究されたらいいものが出てくると思うので、そういうことも将来像として、特産品を作ることも考えたらいいのではないかと思う。

【委員】

若者というところから発言させていただくと、今有るものを残すのは当然いいし、新しいものを作るとなると、生活の中で一番使っているものはスマートフォンだと思う。住み良さを一番感じるのは、毎日消費するものや毎日行く所が便利になることだと思う。具体的には駅やコンビニ、学校、買物が便利になると、若者としては住み良いまちではないかと思う。山陽小野田アプリの開発で、地域通貨とか、病院検索とか、電車・バスの時刻検索とかがあれば、便利に感じると思う。これから機械、AIが発展していく社会だと思うので、それを片輪にして、人との関係が希薄になるといけないので、コミュニティの強化との両輪で、これからの10年15年が過ぎていく時代になるのではないかと感じている。そういうアプリがあると特色のあるまちになるのではないかと思う。

【委員】

宅地開発の件は撤回させていただく。古い家をぜひ使いたいと思う。古き良きあるものを使っていきたい。そして、スマートフォンが若い世代には本当に便利ですが、LINEを高齢者に取得する方法を教えるのは大変である。しかも電磁波が体に良くないということを忘れていてのではないか。電気は全て電磁波が出ており、脳を通過している。食べ物でも、便利なようでも、買ってすぐに食べられるものにはだいたい添加物がある。電磁波と添加物と環境汚染のホルムアルデヒド、某病院で新築の時に見学したらホルムアルデヒドの匂いで、ここは真っ先に医者が病気になると思った。みんながわかっていながら押し殺して誰も本音を言わなくなった。だから農業を盛んにして、添加物の少

ない食の安全を広めていくのは大賛成である。ところで小野田ネギってまだ生産しているか。小野田のアサリはどこへ行ったのか。エイが食べてしまったのか。小野田のアサリを守るために花火大会がなくなったのか。石油会社を守るため、漁師を守るため、そういうことから願う。

【委員】

小野田アサリは1回テレビでやったが、きっと捕りすぎたこと。それとナルトビエイの被害があって、稚貝を放流していくのですが、なかなか育っていないというのが現実です。会社の関係ではなく、自然の摂理ということである。

【委員】

私は漁業の盛んなまちに住んでいたが、今は競り場がなくなった。魚がいない。若い息子さんたちは、いれば潜水だが、よそに働きに出られる。本当に寂れたまちになった。山口東京理科大学ができて食生活に魚がいないと早速困っていくのではないかと思うので、栽培漁業とか養殖とかをしないと、魚が捕れないから漁師さんは外へ出て行く。人口が減って、町内でも端から減っているなので、その辺にも力を入れていかれるといいと思う。貝は今、本当にいない。

【委員】

将来像で夢みたいですが現実的な話で、12年たったら免許を返上しなければいけないと思う。住んでいる所が大休団地という小野田の一番端っこで、スーパーまで歩いて買物に行ける距離ではない。辛うじてバスは通っているが、小野田にはゴルフ場がたくさんあるので、最近のIT技術で言うと自動運転、たぶん12年後には大休団地から

小野田駅に向かって専用道ができ、そこに自動運転のゴルフカートが走っているという将来像を描いているので、少しでもこの中にそういう絵が入っているとよい。山口東京理科大学から老人の多い団地を狙って歩道にゴルフ場のカートが入れ替わりに来ると思うので、I T、スマートフォンもつけておけば免許がなくても生活できる、年寄りになっても生活できる山陽小野田市ということで。老人ばかり増えても困るが、そういうことも将来像として思っている。

【委員】

体に良くて楽しいものは音楽とスポーツだと思う。地域振興にも大切な要素だと思う。ゴルフ場というのが小野田の方々にあまり馴染みがないかもしれないが、旧山陽町にはたくさんある。ゴルフ場を活用することが大事だと思う。70歳以上の方は税金がかからないので、山陽小野田市民が山陽小野田市内のゴルフ場に行ったら若い人でも税金がかからないようにする振興策を、あれは利用税なのか、県の認可がいるのか。

【委員】

3割が県、7割が山陽小野田市である。

【委員】

技術的に難しいかもしれないが、発想的にそういう発想で。宇部市の楠マラソンができたので救護班として行ったが、けがをした選手が岡山県から新幹線に乗って来たとか、下関や北九州からも来ていて、なぜこのまちまで来たのか聞いたら、沿道の人たちの温かい声と、ほかのまちに

はない温かい気持ちがあると、いいイメージを持って来てくれてまた持って帰られる。そこにたくさんテントを出して宇部の特産品を売ってPRもされて、非常にまちおこしとしていいと思う。ここだと竜王山をスタートして、梶の山の辺を走らせて、その間、道の駅でふるまって特産品を提供してあげると、いい風景が出るのではないかと思う。スポーツということと、元々小野田のまちは小野田工業のサッカーが強かったので、サッカーが盛んなまちである。レノファが来たのでレノファの練習試合をたくさん作ってもらい、地域の高校生を無料にしてあげるとかして、オープン戦でも練習試合でもどんどん小野田で組んでもらって、そういうプレイを地元の子どもに見せたいし、よそのまちからも宇部や下関からでも見に来ると思う。スポーツのキーワードもできるのではないかと思う。

【委員】

役所の人には耳が痛いと思うが、同じまちづくりを考えたときに、役職の職員は受け身ばかりではなく、ある意味で仕掛け人になっていただきたいと思う。例えば、空き家対策で空き家の情報を集めて集計しながら、他都市にアピールするような仕掛けを行政マンが、受け身の仕事だけでなく攻撃型のアクションを起こすことが大事だと思う。受け身の姿で済んでいた時代もあったが、今はそういう時代ではないし、都市間競争において生き残るかどうかという岐路に来ているので、そういう発想の転換が行政の方にも必要だと思うし、そういう集計、負の遺産を情報として集めて、それを逆にまちづくりのため、あるいは人口移入のために活用することも大いに必要だという思いがする。例えば駅前のまちづくりにおいても、都市計画決定は先にして道路を作っても、駅前の商店街、商店振興のための施策がその

中に埋められているか。もうばらばらになっている。都市区画整備によって 60 年近く塩漬けにしたものを、ようやくその網を外して都市計画道路を今から作るということだが、この時期に駅前商店振興に関わる仕掛けを導入しないと、先に都市計画道路を作って仕掛けがあとであれば、元のもくあみで全然変わらないような実態が出てしまう。そのため、都市計画道路を決定して網を外したと同時にどういうまちづくりをするのかということをして仕掛けていく、呼び込んでいく努力が必要である。若者をできるだけ定着させようとするなら、薬学部ができたなら女子学生の寮を駅前にもってくるということも方法論であると思う。そういうきめ細かい仕掛けをこれから作っていかないと山陽小野田市全体が沈下してくるようになると思う。負のものを逆に魅力あるものに変えることも仕掛け人の技だと思うので、ぜひ知恵を絞って仕掛けをよろしくお願ひしたいと思う。

【委員】

ずっと気になっていたのが、地域内の過疎は明らかに進んでいて、厚狭小学校の自慢をしたが、出合はここ十数年の間に半分になった。埴生はかつて厚狭の 3 分の 2 ぐらいいたが今は厚狭の 3 分の 1 ぐらいである。今あるままで地域をつなぐのはスマートフォンやインターネットをフルに使う必要があると思う。自動カーブの話があったが、出て来られなくても、そこにいながらでもサービスが受けられる、近くの誰かに頼んでも、欲しいものが届くような。近々に取り組まなければいけないのは医療である。埴生は医者が 2 軒しかなく、1 軒は半日しか営業していなくて、とても不安である。そういう視点で見ると、住むにはイメージが悪い。山陽小野田市の中でそれがどんどん進んでいる地

域がある。今のままでそこに住みながらサービスを受けられるということをこれから考えていく必要がある。空き家の対策も、そのまま住んでいけばあまりに不便なので、にぎわいのある所へ、例えば下関などへ行くのを阻止するために考えていかなければいけない。

【委員】

今日テレビニュースで、山口市と小郡の駅ぐらいに、東京の森ビルの関連会社が計画設計し、コンベンションホールを含めた大きな集合施設を作られると記者発表があった。2～3年後には完成すると思う。予算が百数十億円で作られる。それができるとますます1極集中で、山口のほうにだんだん吸い込まれていく、こういう負の遺産が地方都市においてずいぶん出てくるのではないかと思う。だから特徴のある、お金をかけなくてもできるような知恵が本当に必要だと思う。例えば小野田線の利用者が少なくなって、いかにして乗客数を増やすかいろいろ議論されて、ひょっとしたら小野田線そのものが廃止になるかもしれないという状況である。よく考えたら竜王山の手前の駅を学生が利用しようとしても、トイレがまだくみ取り式である。JRと協議しながら、若者が電車に乗ってそこを利用しようとするような環境整備も必要だと思う。竜王山という大きな資産があるのだから、そういう資産の活用の仕方、人の流動の仕方をもっと真剣に考えないと、この時代に若い人がくみ取りのトイレに入ろうという気にはならない。そういうきめ細かい配慮と、情報を収集しながら、山陽小野田市で一番いいまちづくりはどうかということを、職員自ら仕掛け人となり、我々市民も活用していただいて、一体となってやる必要があるのではないか。

【委員】

まちの活性化という意味で、若者や子どもたちを増やすことは当然だが、高齢化はここ数十年、団塊の世代がいなくなるまでは進んでいくと思う。そのため、高齢者の活躍ということも併せて考えていく必要がある。職が手にある時は、まちのことになかなか気が回らなかった。仕事のほうが一番で子どもは妻に任せっきりで、今になって孫やほかのお子さんのためにという余裕が若干できた。若い時はどうしても自分の生活や会社のことに意識がいった地域のことのできにくいのが、退職して時間が自由になれば周りのことも考えられる。ぜひ高齢者の活用をして、家に閉じこもらずいろいろな所に出て行って、いろいろな人とコミュニケーションをとって、精神的にも健康になり、肉体的にも健康が維持できるのではないかと思う。まちの将来像に関しては、高齢者が出て行きやすい雰囲気のみちづくりができればいいと思う。

【委員】

今言われたように山陽小野田市も高齢化率が高くなって、これから高齢者の活用がとても大変になってくるだろうと思う。高齢者が増えるので国も予算を削減せざるを得ない状況にきている。社協の総会でも話したが、高齢者を家の中から外へ出して、皆さんと話したり動いたり楽しいことをすると、お年寄りの病気も少しは予防できて医療費の削減にもなる。お年寄りの生きがい対策をもう少し真剣に考えていただくことで、高齢者の医療費がこれからずいぶんかかって負担が大きいが、高齢者をチームで支え合おうという雰囲気が出てくる。今、市老連の老人クラブの加入数が非常に少なくなっている。より多くの皆さま方が団体

へ入って、皆さんと会話、行動し、遊びを一緒にすることによって、生きがい対策になるような仕掛けをしていかななくてはならない。そういう組織を活用して行政もバックアップしながら、もっとお年寄りが会合へ出て皆さんと交流して、元気を取り戻すのだから、行政にとってもありがたいことになるので、ぜひともそういう仕掛けを早急にしていただきたいと思う。

【委員】

とてもいい意見をたくさんいただいた。資料にはいいことばかりで全部できれば万々歳だが、まずお金の問題、北欧が上位に並んでいる幸福度だが、北欧は消費税を 30% ぐらい取られる。その 30% に耐えられるかという問題がある。税収が減り、県の積立金も非常に心細い状態になってきた中で、まちが生き残り、さらに活性化していくためにここにあること全部できるようになるのは難しいのではないか、すると選択と集中ということになってくるのではないか。厚狭地区で見ると、先ほど出た地域から北にまだ 8 キロぐらい厚狭である。縦長だし過疎化した所に少し住んでいらっしゃる。コンパクトシティという考え方は、基本的には寄り集まって住んでいただき、交通の便も医療も買物も大丈夫で、保育園も学校もあり、住むために最低条件がそろったまちづくりができるものである。厚狭地区について言うと、厚狭駅の南のほうにコンパクトシティの案がある。小野田地区についても 2 か所そういう考え方で進めることのできる地域があった。ゴルフカートを走らせるということではなく、コンパクトシティの基本は歩いて住めるまちである。それを何か所かにやっていくことが大事である。そのために何が必要かということではないかと思う。たまたま宅地があったとかいい条件がそろっていたと

ということがあると思うが、いい条件がなければその条件にする必要があるのではないか。高齢化はどうしようもなく進んでいく。自分の会社では76歳の方が1年更新、社員で働いている。74～75歳の方も何人かいて、この方々は手に職、技術がある。何歳になっても元気に働いていただいている方もいらっしゃる。老人、高齢者というより、少し年齢を重ねてこられた方々の活躍も必要だと思う。高等学校がとても大事である。4校あるが、中学を卒業して会社に入る人、高等学校を卒業して会社に入る人、大学を出て会社に入る人、七五三と言って、中卒で就職された方は3年以内に7割が辞めてしまうと言われている。高卒では5割が辞めてしまう。ずっと前から高卒は今でも5割である。大卒も3割が3年以内に辞めている。辞めた方はどこかへ行ってしまうケースが多い。出産にしても、高校を卒業した女性が外へ行ってしまう。美祢市ではまもなく出産できる女性がほとんどいなくなる。ワークライフバランスの話聞いたが、2年以内に人口を増やすような取組をしなければ人口がどっと減るということである。女性は40歳を超えると出産が難しくなってくるので、2年以内がカギだという話であった。若い女性がどこかへ行かないようにくいじめなければいけない。これも大きな課題だと思ったので、直近のことであるが、将来の問題であると思う。夢のあるようなことと、少し泥臭いけれど現実ですぐに取り組まないといけない問題を一緒にして、この案をまとめるのがいいのではと思った。

【会長】

今日はこの二つに関していろいろな御意見をいただいた。これからの作業は、この中から何をどう絞っていくのかということだと思うので、いただいたいろいろな御意見を取

捨選択して絞っていき、どれを本当の背骨にするのかを次回以降やらないといけない。

【委員】

質問です。最初のほうで、元々小野田は工業都市である、工業は大切ということと、自然も大切で、相反する気がする。工場を見ながら魚を釣って食べたというようなことを思い出すが、どう解釈すればいいのか。どちらに行きそうなのか。

【会長】

それはこれからである。

【委員】

両極端だが、絞ってしまうということか。

【会長】

一つの背骨を作らざるを得ないので、そこに工業という言葉が入るのか、自然という言葉が入るのか、両方とも入らないのか、それは今からの作業となる。前回のものにはそういう文言が入っていない。背景としては工業があり自然もあり資産もあることを踏まえて考えていこうということである。

(4) 今後の予定について
(説明のみ。)

3 その他

4 閉会